

## 教師による電子会議の有効性 - 匿名性の効果 -

塚本 久仁佳

近年の社会における情報化の進展に伴い、学校教育においても、情報化に適切に対応していくことが重要な課題となっている。これにかんがみて文部省は、教育用コンピュータ及びソフトウェアの整備、インターネットへの接続、教育情報の通信電子ネットワークの整備、双方向の衛星通信の整備等施設の充実に努めている。平成 10 年に改訂された新学習指導要領においては、情報化に対応した教育の一層の充実が図られている。平成 14 年度からのこの新学習指導要領の実施が円滑に進むように、今年度から移行期間として様々な準備が各校で実施され、教育におけるインターネット利用の範囲はさらに拡大している。このような背景において、今回は、児童・生徒を指導する教師側のインターネット利用の有効性を探索している研究を紹介する。

### インターネットを利用した教育

インターネットなどの情報技術を児童・生徒の学習に利用する試みは数多く行われており、その活用法や新しく得られた効果などを記述した本は既に何冊も出版され書店に並んでいる。一方、インターネットは、指導を行う教師にとっても非常に有用な情報源として利用されることが期待される。例えば、具体的な利用の一つとして、授業事例をデータベースとして蓄積することが考えられる<sup>(1)</sup>。このデータベースには、テキスト(文字)ベースの授業記録や指導案だけでなく、ビデオ映像なども蓄積可能である。また、インターネットを通して授業に用いる素材・教材情報を共有したり、そこでの教育技術・方法の共有も可能となるのである。さらには、教師自身の教育にもその効果は期待される。授業に必要な情報のみではなく、様々な経験をもつ教師達の意見を交わすことによって、教師に必要な知識をさらに増すことができるであろう。しかし、指導を受ける側(児童・生徒)のインターネット利用の効果が研究されている一方、そうした教師教育におけるインターネット利用の研究は少ない。そこで、今回紹介するのは、教師教育においてインターネットを利用した電子会議が有効であるかを調査したピアソンの研究<sup>(2)</sup>である。

### 教師の知識と電子会議

シュルマン<sup>(3)</sup>は、教師が教師として必要な知識を得ることが困難であるのは、彼らの仕事を共有する聞き手がいないことや、実践を記録するシステムがないことに起因すると述べている。シュルマンによると、実践的な知識は指導に関する情報を共有することにより得られ、指導に関する情報を共有するためには、同様の関心を持っている他の教師という聞き手や、実践に関する意見を記録するシステムを要する。さらに、経験から学習するというのもまた必要であると述べている。このように、指導に関する知識を調べたり獲得するためには、聞き手、意見の共有、経験からの学習というものが重要である。しかし、そのような環境にない教師は多い<sup>(4)(5)</sup>。

それでは、インターネットを利用した電子会議を行った場合、このような知識は得られるのであろうか。次のような可能性が考えられる。

- ・ インターネット上の共有された空間では、参加者に、それまでは不可能であった指導に関する知識の共有を行う機会を与えられる。
- ・ 電子会議ではメッセージを記録することが可能である。
- ・ テキストベースのコミュニケーションでは、社会的・物理的の手がかりが排除され、コミュニケーションが促進される(本誌 1999 年 3 月号を参照)。

- ・ 様々な意見を得ることによって指導に関する知識を明らかにし、異なる視点からの分析を容易にする（経験から学習することをサポートする）。

しかし、このような可能性はまだ十分に検証されていない。そこで、ピアソンは、教育実習生が電子会議を利用することによって、教師として必要な知識を得ることができるのか、すなわち電子会議の教師教育における可能性について調査を行った。

## 研究概要

ピアソンは、4つの小学校に通った26人の教育実習生を対象に調査を行った。各校にコンピュータを配置し、電子会議の参加者全員（調査対象の教育実習生の他、現職の教師16人と大学の教官8人が参加した）が電子会議用ソフトウェア(FirstClass)の使用法の指導を受けた。電子会議を最低限（あるいは最大限）どのくらい利用すべきかという条件や利用する目的については参加者に何も知らせずに、電子会議がどのような頻度でどのように利用されるかを調査し、電子会議を用いることによって、教師として必要な知識が得られるかを検討した。

### 電子会議の効果に対する認識

電子会議の効果に関する質問項目への教育実習生の回答は、電子会議が「情報を得る(91%)」「社会的コンタクト(95%)」「指導プロジェクト(86%)」「教育問題の議論(81%)」「個人的、専門的問題の対処(71%)」「コミュニティ感の発展(81%)」のために効果的であるというものであり（カッコ内は非常に効果的である/効果的である、と回答した割合）、教育実習生が電子会議というネットワークコミュニケーションを用いることの効果を認識していることが示された。

### 電子会議の難しさや匿名性の効果

一方、コンピュータの使用状況は、私用のために利用するケースが多く、電子会議に参加するための利用は限られていたことが示されていた。ネットワーク上でいくつかの異なる会議が開かれていたが、意見が議論されるためのフォーラムというよりは、掲示板として用いられていた。このように、多くの教育実習生にとって、電子会議は難しいものであることが明らかになった。それは、彼らの教職課程では、皆の前で積極的に意見を出すということを行っておらず、彼らは受動的な聞き手であったからである。さらに、ピアソンは次のようないくつかの問題点を指摘している。

- ・ face-to-face（対面）の会議とは異なり、メッセージを送る相手が誰なのか分からないため、どのような、そしてどのようにメッセージを書けばよいのか分からないという点。
- ・ 電子会議のコミュニケーションでは、face-to-faceでのコミュニケーションにおける視覚的、言語的手がかりがないため、メッセージを書くことが難しいという点。
- ・ 他者からの批判を恐れるという点。

これらのような問題点により、教育実習生にとって、電子会議で積極的に議論するということが困難に感じられたようであったが、中にはスムーズに行われた会議もあった。それは、会議の参加者全員が匿名で行われる会議であった。この匿名の会議には教育実習生が強く関心を示し、他の会議よりも水準の高い相互作用が見られた。この会議では、匿名なため批判を気にすることなく、何をどのように書いても問題ない。そのため気軽に参加することができたのである。しかし、匿名の会議の場合、教育実習生が他者からの批判を恐れる、というような問題を解決せずに避けることになってしまうことが考えられ、教師教育ということを考えると、この点については議論される必要がある。

## まとめと今後の課題

ピアソンの調査においては、教育実習生間の電子会議というネットワークコミュニケーションが効果的であると認識されていること、匿名という環境においては、このような電子会議が効果的であることが示された。しかし、この調査では、電子会議が積極的な議論の場として利用されることは少なく、ネットワーク上において、教師として必要な知識を得るために必要な聞き手、意見の共有、経験からの学習といったものが存在するという結果はほとんど得られなかった。このように、電子会議を用いた教師教育に関する研究は、まだその効果を探っている段階であると言える。

今回紹介したピアソンの調査は教育実習生を対象としたものであったが、教師同士が電子会議を行うことは、現職の教師にも効果的であると考えられる。その際、次のような利用法が考えられる。

### 学習指導のための利用

コンピュータ等の使用に関しては、小学校段階においては「慣れ、親しませる」ことを基本とした学習活動であるが、中学校段階においては、様々な方法で調査した内容を生徒同士で比較・検討・評価しあったりするなど、より進んだ活用を行い、体験を知識のレベルに高めていくことが必要となってくる。そうした学習を指導するためにも、教師が電子会議を利用することによって、様々な情報を得る機会があることは、すなわち、学習指導のための情報源として電子会議を利用することは、生徒の学習活動のレベルを高める上でも有効なことであろう。

### 生徒指導での利用

学習のみならず、学校不適應問題といった生徒指導上の問題においても、学校として問題に取り組む一方、電子会議を用いることにより、専門機関やスクールカウンセラーとの連携を迅速かつスムーズに行うことができる。また同地区の他校のケースにおける情報なども容易に得ることができ、こうした連携を可能にすることが、問題を解決する上での一助となり得るのではないだろうか。

### 実践に反映させる利用

また、情報源としての利用のみではなく、他の教師の様々な意見や経験から自分自身の指導行動・態度について熟慮する機会を得る場としての利用も考えられる。そして、そのようにして熟慮したことを授業や生徒指導へ反映させるというような効果的な利用法が期待される。

新たに創設される総合的な学習の時間など、インターネットを利用した学習の時間が増加していくであろうこれからの学校教育において、指導・教育する立場にある教師の役割が極めて重要であることは言うまでもないが、教師自身のインターネット利用についても、その有効性が認識され、より効果的に活用されるようになることが望まれる。

## 引用文献

- (1)岡本敏雄 1998 コンピュータ・ネットワークとこれからの学校 一橋出版
- (2)Pearson, J. 1999 Electronic networking in initial teacher education: Is a virtual faculty of education possible? Computers & Education, 32, 221 -238.
- (3)Shulman, L.S. 1987 Knowledge and teaching: Foundations of the new reform. Harvard Educational Review, 57, 1 -22.
- (4)Castle, S., Livingstone, C., Trafton, R., & Obermeyer, G. 1990 Linking research and practice for

site-based school renewal. Paper presented at the annual meeting of the American Educational Research Association, Boston, April, ED321402.

- (5) Castle, S., McClure, R.M., & Gillingham, M.G. 1991 Audience in school renewal: Electronic networking in schools, across schools and across groups. Paper presented at the annual meeting of the American Educational Research Association, Chicago, April, ED335762.